

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 6月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。



4月は母の日というのがあって、6月は父の日というのがあるらしい。むかし、長男が未だ東京の大学に通っている頃、『お父さん、丈夫で長生きしてね』というメールが届いた事があった。理解に苦しんだ。意味が分からなかった。暫く考えあぐねた結果、長女に聞いてみた。長女曰く『父の日だったからじゃないの』とあつげなかった。そう、自分が父親という自覚も無く、父の日の存在も知らなかった。この画像は父がいくつくらいの時のものか。自分は5月で73歳になったから、同じ年齢だとすると42年前のものになる。そうすると自分が31歳の時の事となるから、さすがにそれは無いな。そこから、5年ほど経過した70の7か8くらいかも知れない。そうすると、母は60を過ぎた頃となる。そう思い見ると、母はもう少し65くらいかもしれない。となると父は80という事になり、自分は38で35年前の写真となる。此処まで絞り込むと、『当たらずしも遠からず』という父から教わった言葉になる。4歳になるまでに、実に父からいろんな言葉を聞きとった。教えられた訳でもなく、ただ父が語り掛けていただけ。いっぱいあり過ぎて此処に書くまでもない。『女には気をつける』は、さすがに小学校低学年だった。

頓珍漢な顔をしたのかも知れない、『江戸の敵を長崎で討たれるからな』と、その訳迄説明付きだった。説明といえば、『武士は食わねど高楊枝』これだけでは分からなかったと思うが、『武士も大変だったんだなあ』と続けられたおかげで、ニュアンスが理解できた。この程度は小学校に行く前にほとんど終わっていた。だから、学校で下級武士が困窮していく様子を習っても、何ら違和感はなかった。でも、役立つ事ばかりでもなく、父が作り出した言葉も混ざっていて、うっかり家族以外の前では言えなかった。いま想像できることは、すべてが冗談だったかもしれないし、すべてが本気だったかも知れない。奥底で本気ならば表面は冗談だろうが作り事だろうが、何でも良かったのではないかと思える。とにかく言葉を操るのが上手な人だった。

言葉遊びとしてだと思ふし、風流を愛する面も濃くあったので、俳句に熱心になったのは理解できるが、気に入っている二句を紹介しておくと、
『山茶花に 箒立てかけ ひと居らず』
『端に出て 傍に祖母なき お月さま』
いっぱいあり過ぎてすべて読む気にはならないが、父の句を、亡くしてから母が句集として自らの筆で書き出したものが手元にある。でも、自分としてはこのふたつで充分。一時期母も同調して『ホトギス』に投稿していたらしいが、なかなか掲載されず悔しがっていた。父は如何手直しすれば掲載されるか分かっていても、言わなかったのだろう。というのも、父から仲の良かった友人がどうしても掲載されないので、父に相談し、父が指摘した通りに手直しすると掲載されたく、その友達は俳句作りをやめてしまった経緯を幼い頃聞いた事があったから。自分にも何をやっても敵わぬ友達がいたから、解かる気がする。その彼からは『お前がそんなアホとは思わなかった』と三度も言われた。言われても事実だから腹も立たなくて、ずうと仲良く一緒にいた。

俳句は俳句で、如何に情景が浮かんで来て、その情景が心の内の鐘を打つ作りにおけば、合格で、その打つ強さ、深さによって順位が決まるのではないかと思う。先の句は、おそらく寺か神社に父が出掛け、その時の庭の情景であろうと思う。若いかどうかは知らないが、修行中のひとが行うにはうってつけの庭掃除。庭掃除が修行になるかどうかを知るには年月が必要で、その域に達していない者が、何かの切っ掛けでこれ幸いに箒をその場に放棄して、意味不明の修行から逃避した様子を父は感じ取り、その誰にでも理解できる心情の滑稽さを表現したかったのだろうと、勝手に想像して気に入っている。

後の句は、残念ながら身内でしか分からぬところがあるが、父は小学校に行く前に育てられていた祖母に、庭の木に縄で縛り付けられていて、抵抗の声を上げているのを近所の人が見つけた、『もう許してあげて』と進言されて解き放たれるやいなや、座敷に駆け上がり襖という襖、障子という障子の棧をバラバラに打ち壊した事があると話しをしてくれたことがある。それで手に負えないと、遠くにいた叔父に預けられた時期があったらしい。父が育った家で私も育っているのだから、その情景はかなりリアルなのだが、結局また祖母と暮らしていたらしい。その話しを思い出すと、この句はいつも縁側に座り、二人で月を見ていた様子とその心根が、居なくなったことで浮き上がって来る。母がある時、『あなたたちの世話をしていると、お父さんが「僕の母親も生きていればそんな風に世話をしてくれたんやろか」と言った事がある』と言った。6歳上の姉が小学生の時、家業の本屋の集金にお客さんのところに行くと、父がそこで『チー』とか、『ポン』とか言っていたらしく、帰って来て母にその時の気持ちを告げたらしい。そうすると母は『いいのよ、お父さんは子供の頃に苦労して来たから、今は遊んでもらって』と応えたらしい。姉はそれを聞いて『お母ちゃんの言う事はきこう』と思った。何を言いたかったのかは覚えていない。が、姉からその話しを聞いて、さも有りなんと思っただけは確かだ、聞いた時は、既に自分は高校生になっていたと思う。やっぱり姉は、何が言いたかったのだろう。

もうひとつ書くなら、今自分の会社の応接の壁には、父の『唯ダ 信ズベシ』と書かれた色紙が額に入れて飾ってある。送り仮名がカタカナになっているところが明治生まれの父らしい気もするが、母曰く『私がこの家に来た時には既にあつた』と。父は計算すると、遅くとも35歳の時に母を迎えている事になるので、それか、それより若く、この言葉に辿り着いていた事になる。父を亡くした時にこの色紙を発見して、譲り受けてきたのだが、それから27年何度読んでも、このセリフに対して一切のコメントが頭に出て来ない。信じる事の根源的な意味が深まるばかり。人は信じることで成り立っている。救われるかどうかは知らないが、信じなければ何も始まらない。『儲け』という字を振って、信者を作ることが儲けられる事だと説明するひとは多い。だけど、それには何か違和感があった。最近、会社の経営会議で皆に話ししている時、浮かんで来たのは違う解釈で『信じる事が出来る者だけが儲けられる』と頭に出てきた。自分も含めて、自分以外のすべてを信じられる者だけが成就できる世界がこの世にはある。そういう意味では、自分以外を自分の信者にする事ではなく、自らがすべてを信じる事で、この世の成り立ちと一体になれる。『唯ダ 信ズベシ』とは、父である無しに係わらず何かを見抜いた神髄に違いない。自分自身はおかげさまで、この『信ずる』概念に満ちた空間に身を置く事が出来るようになってきた。上とか右とか、斜めも無い、深くもない、『唯いる』だけ。下手したら自分という意識もない。

最近はお豆島の家で、よく時を過ごしている。そんないい場所とも思えないが、何故か不思議と其処にいてこんな感覚に浸る。先日ふと気がついた。そうさせているのは直ぐ近くにある楓の持つエネルギーだと思ふようになった。庭木には伐採してしまったものも含めて沢山の木があるが、剪定を一度もしていないのは、不思議なことにこの楓だけ。

今年に入り、たった1時間の月間通信に自分を縛り付けていられない。文にそれが現れていると、愛読者だと言い、『父』について書くとアドバイスをくれた。

有限会社アルファー 吉田清一郎